vol. 11

2008.11.10

MONTHLY REPORT

マンスリーレポート

愛媛大学
愛媛大学大学院医学系研究科
学務室大学院チーム
TEL(089)960-5868

岡山大学
岡山大学大学院医歯薬学総合研究科等
学務課大学院係
TEL(086)235-7986

香川大学
香川大学医学部学務室
(入試担当)
TEL(087)891-2074

川崎医科大学
川崎医科大学学務課
教務係
TEL(086)464-1012

高知女子大学
高知女子大学学生課
大学院担当
TEL(088)873-2157

高知大学
高知大学医学部学生・研究支援課
大学院教育担当
TEL(088)880-2263

徳島大学
徳島大学医学・歯学・薬学部等
事務部学務課大学院係
TEL(088)633-9649

山口大学
山口大学医学部学務課
大学院教務係
TEL(0836)22-2058

四国がんセンター
TEL(089)999-1111

http://www.chushiganpro.jp/

Mid-West Japan
Cancer Professional Education Consortium

中国・四国広域がんプロ養成コンソーシアム

趣旨・組織

がんは、わが国の死亡率第１位の疾患ですが、がんを横断的・集学的に診療できる専門家が全国的に少なく、その養成が急務とされています。また、近年の高度化したがん医療の推進は、がん医療に習熟した医師、薬剤師、看護師、その他の医療技術者等（コメディカル）の各種専門家が参画し、チームとして機能することが何より重要です。そのため、がん医療の担い手となる高度な知識・技術を持つがん専門医師及びがん医療に携わるコメディカルなど、がんに特化した医療人の養成を行うため、大学病院等との有機的かつ円滑な連携のもとに行われる大学院のプログラムが「がんプロフェッショナル養成プラン」です。

ごあいさつ

当コンソーシアム事務局では、講演会、海外研修、学生募集などの連絡を目的としたマンスリーレポートを発行しています。

本プランは、中国・四国８つの大学が一つのコンソーシアムを作り、各大学院にメディカル、コメディカルを含む多職種のがん専門職養成のためのコースワークを整備し、これに地域の28のがん診療連携拠点病院が連携することにより、広い地域にムラなくがん専門職を送り出すプログラムです。がんに関わる多職種専門職が有機的に連携し、チームとしてがん診療ならびに研究にあたることができるよう職種間の共通コアカリキュラムの履修を出発点として教育研修を行います。また、国内外のがんセンターと連携し指導的ながん専門医療人養成のファカルティ・ディベロップメントを連動させ、がん専門職養成の教育能力を強化します。こうして専門的臨床能力、チーム医療や臨床研究の能力をともに身につけたがん専門職が数多く輩出されることにより、地域におけるがん治療の均てん化、標準化が期待されるとともに、臨床研究の活性化が期待されます。

本誌をきっかけに、大学院入学や各種セミナーへの参加等をご検討いただければ幸甚です。

中国・四国広域がんプロ養成コンソーシアム
事務局

徳島大学大学院新入生　がんプロへの思いを語る

谷口達哉さん

今年度、消化器内科を専門とする道を選び、同時に徳島大学大学院医科学教育部がんプロフェッショナルコースに入学しました。

わが国において消化器がんは発生頻度、死亡数ともに最も多く、これらの数を少しでも減らすことが消化器医の使命だと思っています。近年、消化器分野におけるがん治療の発展はめざましく、低侵襲的な治療の開発が進む一方、細胞内レベルでの発癌機序の解明による分子標的薬を用いた治療が広く行われるようになってきました。さらに、化学療法や放射線療法の新しいレジメンも多く試されており、薬剤師、放射線技師との連携は不可欠であると思われます。また、ガンの解明や治療が進む一方、疼痛緩和、心のケアなど患者のQOLを考えた医療も重視されてきており、一番患者と多く接する看護師とも連携が必要です。

徳島大学は医師、薬剤師、看護師、放射線技師、管理栄養士等の全８コースがそろった中国・四国広域で唯一の大学であり、連携したがんプロの養成が可能です。多職種によるチーム医療は細分化、専門化される今日の医療において必須であり、ここで自分自身が先導的役割を担えたらと思います。

最後に、がん治療ができる専門医を目指すのはもちろんですが、同時にスクリーニング、診断ができる臨床医にもなりたいと思っています。がんプロで得た知識・技術をがんで苦しむ多くの患者様に還元できるよう精進していきます。

岩橋衆一さん

今年度、徳島大学大学院医科学教育部に入学し、腫瘍外科医がんプロフェッショナルコースを選択させていただきました。我が国において、がんは死因の第一位であり、がんに対する集学的治療の重要性は日に日に高まっております。その中で、がんを集学的さらには横断的に診療できる専門家集団の養成を目指す「がんプロフェッショナルコース」への入学は、まだまだ医師として未熟である私にとって、期待と同時に不安も大きいものでありました。しかし、講義、研修を通して自分の専門域とは異なった職種の方々と接する機会も頂き、がんに対するチーム医療の重要性を強く認識することができました。また他の方々のレベルの高い知識を吸収する機会も得ることができ、今後の自分にとって非常に励みとなりました。さらに研究におきましては、先輩の先生方のご指導を頂きながら、日々悪戦苦闘いたしております。臨床面、研究面ともに精進し、自分の知識、技術をがん医療の発展に役立てられるよう成長していきたいと思います。

吉岡隆文さん

今年度、私は徳島大学大学院に入学し、消化器・移植外科分野、がんプロフェッショナルコースを選択しました。

臨床に関しては、現在、島田教授のもと先輩方から指導をいただきながら、肝・胆・膵・消化管等のがん疾患を含め、入院患者さんの診療に日々あたらせていただいております。また、緩和ケアや抗がん剤に関する講義も多く行われており、そこで学んだことを臨床に生かせればと思っています。当院では、定期的にcancer boardが診療科を問わず開かれており、他科の先生方との意見交換も行いやすい環境にあると思われます。

また、がんプロフェッショナルコースは臨床のみならず研究分野に関しても比重がおかれており、私自身も大学院入学後は研究に携わらせてもらっています。まだ満足いく結果は得られませんが、臨床に応用できるよう研究分野での実力を磨いていきたいと思っております。修了後は、がんプロフェッショナルコース一期生の名に恥じぬよう、臨床・研究共に知識を吸収していきたいと思います。

田中靖子さん

本年４月、徳島大学大学院がん専門薬剤師コースに入学しました。薬剤師になって7年目になりますが、まだ薬剤師として働き始めて間もないときに“夢の新薬”、“希望の薬”と呼ばれたゲフィチニブが発売されました。発売からあっという間に浸透し、爆発的に使用されるようになったことは、今も忘れられません。あれから7年経ちましたが、その後も市場には次々と分子標的薬と言われる新規抗がん剤が登場し、新しいエビデンスが生まれ、がん医療の中でもがん薬物療法は大きなウェイトを占めるようになってい

徳島大学大学院新入生　がんプロへの思いを語る

ます。そして従来の抗がん剤とは違った毒性の発現にも注意を払う必要があり、新薬の適正使用と副作用マネジメントへの薬剤師の関与は重要な役割です。

私は現在、主に臨床試験コーディネーター（CRC）としての業務に従事しており、まさに次世代の夢の新薬になるかもしれない“薬のたまご”とそれを投与することに協力していただくボランティアの患者（被験者）に接しています。新しい薬を少しでも早く一般の患者へ届けるだけでなく、安全で有効な最新の治療薬、治療法を届けるためには、被験者の人権と安全を確保し、臨床試験が適正に行われるよう関わっていかなければなりません。

本コース1期生としてのプレッシャーもありますが、臓器・診療科・職種の壁を超えて、がん医療の広い知識と最新情報を共有できることを期待し、よりよいがん医療のあり方を学んでいきたいと思います。

舘　美加さん

がんプロがん専門看護師コースに入学し、半年あまりが過ぎました。十数年の臨床でたくさんの患者さんと出会い、日々の実践を振り返り、疑問を明確にし、その解決に向けての専門的な視点や実践へと繋がる学びを深めたいと、このコースに進学しました。仕事と学業の両立で、限られた時間ですが、学びの機会を得られたことに感謝しながら、がん専門看護師を目指して、ひとつひとつの学びを積み上げていきたいと思います。

富田優子さん

卒業から9年間、中規模クラスの一般病院の現場で働いてきました。そこで感じたのは、教科書や雑誌に書いてある緩和医療と現場とのずれでした。がん性疼痛に苦しんでいる人を目の前にして、なにもできることのない自分に歯がゆさを感じ、がん専門看護師になりたいと思うようになりました。

この中国・四国広域がんプロ養成コンソーシアムのおかげで他府県から様々な講師の方々に来ていただいたり、勉強会や講演会が多数行われていたりと、じっくり勉強するためにこの上ない環境にいられることに日々感謝しています。

平成20年現在、がん専門看護師は日本に104名いますが、徳島にはまだ一人もいない状況です。それだけに周囲の方々の期待が大きいことも感じます。この環境に感謝しつつ、日々精一杯勉強していきたいと思います。

古川弘子さん

今年度、徳島大学大学院に進学し、がん専門栄養士コースに入りました。がんに特化した管理栄養士を目指して、がんに対する栄養学はもちろんのこと、多職種との連携や、がん治療についても包括的に幅広く学びたいと思い、このコースに入りました。徳島県外在住の社会人大学院生の私は、定期的に大学に講義を聴きに行くということはできませんが、e-learningでも講義を受講することができる環境を嬉しく思っています。

治療をしている患者様の食事に対する悩みは多く、がん自体や抗がん剤治療・放射線治療によっておこる免疫力低下や、食欲不振、味覚の変化や口腔内の炎症など、食事摂取に関する問題は多くあります。また、がんによる生体の消耗など栄養面での問題や緩和医療における食事提供や栄養のあり方もあります。できるだけ、経口から摂取できるよう、また本人の意思に沿えるよう、食事摂取や栄養面の問題に加えて全身状態や治療方針等も包括的にサポートできるチームの一員になりたいです。

また、胃管吊り上げ術後放射線療法による副作用で経口摂取困難、嚥下がしにくい患者様のどうしても口から食べたいという要望に、食品の物性を考慮したサポートで応えることができた事例から、現在、食品の物性とパターン化に関する研究を行っています。がんにより経口摂取が難しい場合に、その中でも摂取可能な本人に適した食品・食材を物性の観点から客観的に評価し、患者様の口から食べたいという要望に応えていくことができるよう研究も進めていきたいと思います。

がんチーム医療に参画し、よりよい医療をコメディカルの立場からサポートしていけるよう勉強していきたいと思っていますので、どうぞよろしくおねがいします。

原　康男さん

私は新卒の診療放射線技師として徳島大学病院に就職し8年になりますが、放射線治療業務でがん治療に直接関わるようになり丸５年が経過したことを期に、平成２０年４月より新設されたがんプロ養成医学物理士コースに社会人大学院生として入学しました。

放射線治療分野での診療放射線技師の５年経験というのは一つの節目であり、放射線治療関係の認定資格受験や、治療施設の認定基準などにおいて一定の基準を満たしていると扱われます。５年という長い期間を必要とすることからも、放射線によるがん治療は専門性の高い知識や技術と同時に、幅広い知識が問われるということも臨床の現場で日々の実感としております。そんな中、自分が５年経験者であるとの責任も感じ始めたことが、私のがんプロ養成コース入学のきっかけとなりました。

診療放射線技師の他、医師、看護師などの専門職が集まるがん治療の現場で働く私にとって、本コースの履修は、がん治療における深い専門知識を得ることはもちろん、そこで得られた新しい知識が他職種との連携に重要な役割をすることが分かり、自分の専門に固執しがちになるのをほぐす要素もあったと思います。そのことからも個人としてだけでなく、チーム医療、がん治療への貢献という意味でもとても有意なことだったと思っています。

また、大学院での研究テーマは、体幹部悪性腫瘍放射線治療における呼吸同期システムの有用性を確かめたいと思っています。この呼吸同期システムとは、人間の呼吸により上下する腹壁の動きをグラフ化し、呼吸の大きさや間隔を山形の呼吸波形として視覚化できるようにしたもので、患者さんにその波形を見てもらいながら、山ができるだけ小さく、同じ周期で呼吸してもらうことにより、呼吸による腫瘍の動きをできる限り抑えようとするものです。放射線治療の特徴として、腫瘍に十分な放射線量を投与しようとすれば、腫瘍を含めて腫瘍周囲の正常組織にも一部放射線を照射せざるをえません。呼吸性移動のある腫瘍では、腫瘍の動きをカバーするため照射野をその分広く設定するしかなく、正常組織の含まれる範囲が拡大します。呼吸動機システムを応用し、腫瘍の動きをできるだけ小さくすると、腫瘍線量は落とすことなく周囲の正常組織をできるだけ照射しないピンポイント的治療が可能になると考えられます。このシステムの有用性を研究し、臨床にフィードバックさせることをテーマとし、がんプロコース履修者としてこれからもがん治療に貢献していければと考えています。

佐々木　幹治さん

私が徳島大学の放射線治療業務に携わるようになり早いもので5年が経過しました。放射線治療に配属されたばかりで、右も左も分からないまま、ただがむしゃらに仕事をしていた頃が、つい先日のように感じています。しかし、放射線治療技術分野におけるこの数年間は、IMRT（強度変調放射線治療）などの高精度放射線治療が急速に普及することにより、あらゆる環境が一変したといっても過言ではない時期にあたっていると思います。高精度の放射線治療を患者に安全に完遂するためには、自施設の治療精度を定量的に評価し、治療における全てのプロセスに含まれる誤差を総合的に分析し、さらにその誤差を各施設で設定した範囲内に抑えるよう管理する必要があります。それらの業務を正確に精度良く実施するため、私は本年4月より徳島大学大学院に設立されたがん医療に携わるコメディカル養成コースの医学物理士コースに進学しました。このコースでは、がん治療の基礎および手術療法、放射線療法、化学療法、緩和療法などの臨床腫瘍学を他職種とともに履修し、チームによる実習・研修が行われています。又、国立がんセンター、大学病院等との有機的かつ円滑な連携を行うことにより、がん治療に特化した医療人材の養成を行うことが目的とされております。本コースを学び明確に実践していくことにより、放射線治療精度を正しく定量的に評価し、管理することができるようになると思います。又、私の大学院における研究は、放射線治療精度のひとつである照射位置精度の検証を行っています。多くの一般的な施設における放射線治療では照射直前に直線加速器を用いて撮影を行います。その画像と治療計画時とのセンター位置誤差を骨構造基準に確認し、最適な位置に補正した後に治療が行われております。徳島大学では直線加速器と同室にCTが設置されているため、骨格だけでなく腫瘍自体による位置照合を可能としております。そのため、腫瘍に対して正確な位置で治療が可能であると考えられます。これらの位置精度は治療成績に影響する重要な因子となるとAAPM REPORT　NO13（PHYSICAL ASPECTS OF QUALITY ASSURANCE IN RADIATION THERAPY）の中でも述べられています。今後、私はこれらのデータを正確に解析し、定量的な評価を行った上で臨床にフィードバックできればと考えています。最後になりましたが、放射線治療技術を専門とする私たちは、科学的にも社会的にも最適な医療を提供するため、時代に即した絶え間ない研究・教育が不可欠であります。地域住民の期待に背くことのないよう、今後ますます技術革新が進む中、絶えず新しい知識を身につけ実践していくことが重要であると考え、放射線治療に必要な知識・技術・心を探求し、安心で安全な放射線治療を提供し続けられるように頑張っていきたいです。

徳島大学

徳島大学大学院

コーディネーター　**曽根　三郎**

がんプロ養成の取り組み

がん死亡者数が第一位となり、その克服は国民的な課題であり、昨年に制定された「がん対策基本法」により、がん薬物療法専門医、放射線治療医、緩和療法医の育成が急務とされている。質の高いがん診療があらゆる地域で提供されるには、職種を超えたがん専門医療人によるチームワーク医療が求められている。

平成19年度にスタートした中国・四国広域がんプロ養成プログラムを推進するために、徳島大学は4つの大学院教育部（医学系、薬学系、保健学系、栄養学系）に臨床腫瘍学教育課程を設置して、がん専門医（がん薬物療法医、腫瘍外科医、放射線治療医、緩和療法医）、がん専門薬剤師、がん専門看護師、医学物理士、がん専門管理栄養士の8つの異なるがんプロフェッショナル養成を目指したコースを設けている。平成20年度の徳島大学大学院がんプロ養成コースへの入学者数は総計35名であり、予定していた入学予定者数を大幅に上回っている。がん診療経験が豊富で多くの実績を持つがん専門スタッフが各コースのカリキュラムに沿って親身な教育・研究指導を行っている。

中国・四国広域がんプロ養成プログラムの目玉として、臨床腫瘍学に必須の共通コア科目と共通科目からなるカリキュラムが設定されており、共通教育の実施には参加8大学間で受講できるe-learningシステムを導入し、最先端の臨床腫瘍学がいつでもどこからでも学べる体制となりつつある。徳島大学では、4つの教育部を横断する臨床腫瘍学教育課程においてがん専門医療人として共通の知識や実習体験を通して、チームワーク医療を学び、実践できる素地を養うため、単位取得を義務づけている。

今回のプログラムは、大きな特色としてがん診療に従事している専門医、がん専門コメディカルを対象に、国内のがん専門病院（国立がんセンター中央病院、癌研有明病院、四国がんセンター）での研修を支援するインテンシブコースを設けている点にあり、助教のポジションで1カ月から3カ月の研修をサポートする体制をとっており、平成19年度に6名が参加し、平成20年度には8名が研修予定である。

今後とも、8つのがんプロ養成コースへの大学院生受け入れを積極的に推進するとともに、大学病院との連携を図り、完成度の高いカリキュラム策定によるがん専門資格の取得、臨床研究による学位取得、並びに人材養成を目指している。

がんプロとしての専門資格と学位の両方を取得したい方、是非とも大学院臨床腫瘍学教育課程の門をたたいて下さい。
必要情報は、ホームページ
(http://www.shuyonai.umin.jp/ganpuro/ganpuro-kari.html)から得られます。

蔵本キャンパス

大学院ヘルスバイオサイエンス研究部

がんプロフェッショナル養成会議の様子

がん専門薬剤師養成コース
土屋　浩一郎

「がん専門薬剤師養成コース」には岡山大学、高知大学、そして徳島大学の３校が参加しており、平成20年4月から院生受け入れを開始いたしました。

徳島大学では現在3名の院生（修士課程2名、博士課程1名）が在籍しています。がん専門薬剤師はがん薬物療法の最適化に参画し、またがん薬物治療の安全性確保に積極的に関与することが求められているため、カリキュラムにおいても①がんの一般的知識（がん疫学、診断、分類、がんの臨床研究）の習得、②薬剤師の専門性として抗がん剤の薬理作用、薬物動態、治療ガイドライン、支持療法であるオピオイドや抗うつ薬等の薬理作用の理解、③薬剤部の協力のもと、抗がん剤の取り扱い・薬学的がん管理技術の修得、④病院内でのがんチーム医療への寄与、⑤がん関連の研究と発表（学会発表と論文発表）等をサポートできる内容にすることで、がん専門薬剤師認定試験にも対応できる構成となっています。

本コースでは、3大学間で単位互換を図り、更にe-learningを積極的に取り入れることで、学びやすさにも配慮したカリキュラムの構築を目指しています。

将来、中国・四国地方から１人でも多くのがん専門薬剤師がこのコースから生まれるよう、諸先生方のご協力をよろしくお願い申し上げます。

抗癌剤調製の様子

がん専門看護師コース
雄西　智恵美

徳島大学大学院保健科学教育部は平成18年4月にスタートしたばかりの大学院です。博士前期課程には８つの専門から選択できる看護学修士コースがありますが、平成20年4月入学者より、専門のひとつである「ストレス緩和ケア看護学」において、がん看護専門看護師に必要な科目を設定しています。平成21年には、教育課程の認定審査を申請し、『専門看護師教育課程』の認定をめざしています。本学では、stress-copingとpalliative careを主要な概念とし、がん患者が化学療法や手術などの治療過程に主体的に取り組み、長い療養生活をより良く生き抜くセルフケアを支援するための卓越した看護実践力の育成をめざしています。専門看護師のカリキュラムは指定された学習内容が26単位ありますが、共通コアカリキュラムを最大限活用し、また、複数の医療専門職の教育課程のある本学の学習環境の利点を生かして、専門的知識・技術はもとよりチーム医療が実践できる能力の強化を図っていきたいと考えています。例えばCancer Boardに参加し、看護の専門的立場から意見交換できる力を身につけられるようにしたり、緩和ケアチームやＮＳＴなどの活動にも積極的に関わり、チーム医療の機能について理解を深めるとともに、最先端のがん医療を探求できる学習環境を整備しているところです。さらに、“がんプロ”でコンソーシアムを組む３大学合同のがん看護学集中セミナーをプログラムしています。学生が共に切磋琢磨し、大学の枠組みを越えた場で知的交流ができる機会を提供し、広い視野をもった柔軟な思考のできる人材の育成を目標にしています。がん看護に関心をもつ看護師達のキャリアアップを支援していきます。

保健科学教育部のある校舎

ゼミナール風景

徳島大学

がん専門栄養士コース
中屋　豊

近年、nutritional support team (NST)が注目され、栄養士も入院患者の栄養管理をチーム医療として行う機会が増えてきました。がん治療における栄養は非常に重要で、QOLの向上、治療の完遂のためには、良好な栄養状態を保つ必要があります。このように、がん栄養の専門家が必要とされており、このコースをもとにがん専門栄養士を育成し、将来何らかの形で認定する仕組みを作り上げたいと考えています。

徳島大学がん専門栄養士コースは主に博士後期課程の社会人大学院生を対象にしています。社会人として活躍されている栄養士の方が、臨床の現場で研究し、論文をまとめて学位が取れるようにしています。また、既にある徳島大学の臨床栄養のコースの大学院では、修士の学生も入学が可能で、このコースでもがんに関する授業を受講できるようにしたいと考えています。このコースは既に大学院生が入学しており、現在、インターネットを用いて受講しております。その点、がん専門栄養士のコースはまったく一からのスタートではなく、ある程度準備ができている状態です。がんプロによる大学院生は、平成20年の4月から入学しており、「がん専門栄養士(仮称)」の育成のために、12単位の授業をさらに追加開講しています。

ここでは、がん栄養に関する、基礎から、臨床、実際の管理などを中心とした授業を行うことになります。幅広く、深い知識および技術の習得が可能であり、チーム医療の一員として、医師などの他の医療スタッフと対等に討論しあえる実力をつけることをめざしています。

医学物理士コース
上野　淳二

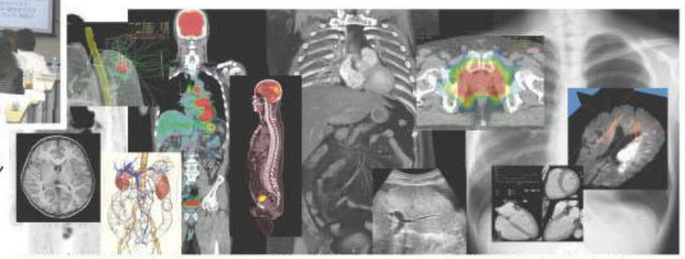
がん診療において放射線医学の果たす役割は大きく、画像診断、Interventional Radiology (IVR) および放射線治療がその要素であります。近年、放射線治療技術の進歩により、放射線治療の需要が増しているところでありますが、これに対応する放射線治療専門医や放射線治療専門の診療放射線技師、医学物理士は不足しており、これらの育成が急務となっています。

この度、中国・四国広域がんプロ養成プログラムでは、放射線治療専門医コースと併せ、医学物理士コースが設定されており、コンソーシアムの中で岡山大学と高知大学、徳島大学において医学物理士コースが開講されます。医学物理士には放射線診断、核医学、放射線治療等の分野がありますが、この医学物理士コースでは、主に放射線治療分野の医学物理士や放射線治療品質管理士の養成とその資質向上を目指した教育プログラムを提供します。

中国・四国広域がんプロ養成プログラムに設けられた８コースに共通する教育科目である共通コアカリキュラム６科目とともに、医学物理士コースでの共通科目として放射線治療品質管理学特論とその演習をコース開講３大学間で設定し、コンソーシアム内での教育内容を共通化しています。

医師や診療放射線技師とは別の職業資格である医学物理士を養成し、将来、医学物理士が診療システムの中に広く取り入れられ、この職種による各種精度管理などが、各種疾患の治療成績向上に結びつくことを期待するものであります。

大学院のオープンカレッジ「がんと栄養」
平成20年7月26日、27日徳島大学キャンパスにて全国から約60名が出席



放射線医学領域の各種画像診断モダリティー画像と放射線治療計画画像

徳島大学病院

病院長　**香川　征**

徳島大学病院は昭和18年徳島県立医学専門学校を前身とし、徳島医科大学附属病院そして昭和24年徳島大学医学部附属病院として歩み、平成15年徳島大学歯学部附属病院と統合し現在に至っています。

病院の基本理念は「生命の尊重と個人の尊厳の保持を基調とし、先端的でかつ生きる力を育む医療を実践するとともに人間愛に溢れた医療人を育成する」としており、ISO9001、プライバシーマーク、病院機能評価等の認証を取得し医療の質の向上に努めています。

また、平成18年6月にがん診療連携センターを設置し、10月にがん診療連携拠点病院に指定されました。

本院のがん診療連携センターは、最新鋭のがん診療設備と専門のスタッフを備えた本院のがん診療を診療科横断的に行う司令塔的な活動をするセンターです。

本センターは1)徳島県下のがん診療の中核設備として、地域住民や地域の医療機関から高い信頼を得て、地域のがん診療に寄与すること、2)教育研修施設として、学生教育、研修医の専門医取得のための教育、看護師や薬剤師などのコメディカルなどの専門職教育を行い、がん診療に従事する医療従事者を育成し、また情報提供や研修会を通じて、一般医師への生涯教育をすること、3)研究施設として、がん研究を積極的に推進することを、使命としています。

そして、本センターは次の部門より構成されています。すなわち、1)がん診療企画部門、2)がん化学療法部門、3)がん診療連携部門、4)がん研究・研修部門、5)がん登録部門、6)がん予防・診療広報・相談部門、7)緩和ケア部門の計７部門で、それぞれ積極的に活動をしています。またこのセンターは中国・四国広域がんプロ養成コンソーシアムと密な連携のもと、しっかりした協力体制をとっています。

手術風景

←抗癌剤調製室

外来がん化学療法室

がんセンター合同会議

Johns Hopkins Singaporeにおける研修報告

今回私は、Johns Hopkins Singapore International Medical Centre（以下JHSIMC）にて２週間の研修をさせていただきましたのでご報告申し上げます。

今回の研修目的として

1. 他職種がどのような方法で連携を取っているか
2. 看護師は患者の症状をどのように評価し、実践に移しているか
3. 看護師のスキルアップや生涯教育について

以上の３点を掲げました。

研修の焦点を同職種の看護師とし、より現場に近い形での研修を希望しました。JHSIMCのスタッフの方々に要望を取り入れたプログラムを組んでいただいたことで充実した価値ある２週間となりました。

Ⅰ.研修の概要

１週目は入院棟での研修、２週目は外来での研修が主となりました。初日に顔合わせが行われました。２週間どのような研修を行っていく予定か、JHSIMCの受け入れに対する姿勢などのお話がありました。その後、入院棟と外来の両方の施設を見て回りました。午後はInpatient Nursing Manager（病棟看護師長）より看護体制、勤務体制、看護業務、化学療法の概要等を説明していただきました。２日目からは入院棟で、Oncology Diploma（がん看護認定）を取得しているMs. Vivien Lim, RNがプリセプターとなって指導を受けることとなりました。その間にTumor boardへの参加、Medical Social Workerとの面談、看護リーダーミーティングへの参加、病棟患者カンファレンスへの参加をしました。

２週目は外来においてプリセプターMs.Yen Feng, RNについて幅広い化学療法患者の治療と看護ケア、患者教育を研修することとなりました。また蘇生術の講義が入院棟のスタッフに向けて計画されており、聴講しました。さらに隣接するシンガポール最初のホスピスDover Park Hospiceを見学する機会にも恵まれました。これはシンガポールの医療システムやがん患者を知る上で有益だろうとのMs. Sze Fui, RN, Nursing Educator（副看護師長）の計らいによるものでした。

化学療法用のポンプ
同時に４つの点滴静注プログラムを管理できる。
アメリカで使われているのと同じ型で
シンガポールではJHSIMCが唯一。

SPILLKIT

SPILLKITの中にセットされているもの
化学療法の薬剤がこぼれてしまうと
これらの装備をして片付けを行っている。

Ⅱ.シンガポールの医療とJHSIMCについて

JHSIMCが自由診療で中東や近隣諸国からのがん患者を受け入れていることは、既にご存知と思いますが、中にはシンガポール国民や永住権を持つ人々もいます。

シンガポールは、基本は全額自己負担での医療と政府援助下での医療との２つの体制から成り立っています。それを支える個人の医療費貯蓄としてMedisaveというものがあります。日本の皆保険のような制度で、給料の20%を将来の医療費に備えて自動的に貯蓄されます。これは雇用されている労働者のみで自営の方などにはなく、自分で貯蓄したものを自分や家族に使用するといった制度です。そのためシンガポール国民と永住権を持つ人々でも、がんに罹患し医療費を自己負担できる場合はJHSIMCに紹介になるというシステムが成り立っています。反対に、JHSIMCの患者であっても長いがん治療の結果、政府からの援助を得なければならなくなった患者はダウングレードしてTang Tock Seng Hospital（以下TTSH）での治療を受けることになります。

政府からの援助を受けるには、個人、家族の財政に様々な条件があります。また一旦政府援助が決定してしまうと医療の面でも主治医を選べなかったり、使用できる薬剤が制限されたり、入院環境に様々な制約がもたらされることとなります。実際にTTSHの一般病棟に見学に行きましたが、６人１室のドアのない部屋で、シンガポールの蒸し暑い環境の中、エアコンなしで闘病生活を送っていました。またTTSHの中にある外来化学療法室は狭い４畳ほどのスペースに10人以上の患者が点滴治療を受けており、JHSIMCの外来化学療法室との大きな差を実感しました。

Ⅲ.看護師からみた他職種との連携

①医師

毎日医師の回診がConsultant毎に行われ、受け持ちの看護師は回診に同行します。回診は患者一人ひとりにじっくりとした時間をかけて行います。回診時に投薬の変更や治療法の説明が行われたりするため、すばやいコミュニケーションが可能と思われました。毎週金曜日夕方に行われるCase Reviewではすべての医師が参加し、患者についての報告・方針が話されています。Nursing ManagerとNurse Educatorが参加し直接現状や治療方針を聞くことができます。また毎週木曜日に行われるDischarge meetingは、話し合いというよりは共通認識を持つという意味合いでの開催が大きいように思われました。毎週すべての患者についての方針と入院期間予定が話され状況による変化に対応していました。これはMedical officerからの説明でしたが、看護師、薬剤師、Medical Social Worker(MSW)と多くのスタッフ間での患者方針への共通認識に貢献していると感じました。これらのことはJHSIMCの基本理念の上にさらに、自由診療であるために患者数に絶対的なゆとりがあり、時間をゆっくりとかけられることもそのような環境を作っている要因であるといえます。

②Ms. Anna Toy, MSW

上記に書いたように毎週Discharge meetingに参加しているので患者の様子を知ることができていました。問題となる患者に対しては迅速な対応がなされていると感じました。同じフロアに彼女のオフィスがあり常駐しており、普段から顔を合わせていることが物理的にも密接な関係をもたらしていると思います。実際に化学療法中に肺炎を合併しICUに入室していた患者が、水曜日に帰棟しましたが、翌日木曜日には既に家族との話し合いがなされている記録があったことには驚きました。挿管を拒んでいた患者とそれを支持する家族、治療を続けたいTTSH呼吸器内科の医師、どのような治療方針が患者にとって最適か葛藤していたJHSIMCの医師・看護師の仲介役を担っていました。自由診療だからこそ患者や家族は治療方針に加えて、財政的な問題もあり意思決定に葛藤、苦難するようです。そこでMSWの経済面での知識を持つ第３者的な立場は医師・看護師・薬剤師から大変重要視されている様子が伺われました。

③薬剤師

Pharmacy managerは外来におり、入院棟にも薬剤師１人が日中の時間帯は常駐していました。MSWと同じように常に近くにいる存在であり、疑問が生じた時にすぐ解決できる環境にあることは大変円滑な連携に貢献していました。

Ⅳ.プリセプターMs. Vivien Lim, RN

彼女は31歳で、約１年前にOncology Diplomaを取得しています。３年の看護教育を経てRegistered Nurseになった後TTSHに就職。一般外科での経験を積む一方、TTSHのがん患者に化学療法を施行するにあたってJHSIMCで研修を行ったようです。その中で、がん看護に興味を持ち認定を取ることにしたと言っていました。がん看護認定の為の研修は10ヶ月間でその間には、数え切れないほどの症例研究とプレゼンテーションを繰り返し、研修を終了したようです。

シンガポールのがん看護認定制度には、日本のような更新制度はありません。日々変化するがん医療について自主的に勉強していく必要があるということで個人にまかされているようです。

彼女は資格取得後のJHSIMCへの入職になるため、JHSIMCでの経験は浅いですが、がん看護エキスパートとして新雇用スタッフに対する指導、就職希望者への面接をNurse managerと共に施行していました。また私に対する指導も経験から気持ちが分かると多くの配慮をしてくれました。指導方法は、まず問題を提起し、考える時間を与えた上で、答えを導き出す手がかりを与え続けるといったものです。JHSIMCの新雇用者はがん看護の経験はないけれども看護師としてのキャリアを備えた看護師なため、同様に扱ってくれている様子でした。単なる研修に来た看護師としての位置づけではないことを実感し大変嬉しく思いました。『考えさせる』。この方法は、教育をする上で最も重要な方法であると考えます。今回看護師としての経験を経て再び指導される側を経験できたことで、病棟で指導する側として相手の側に立った指導に役立てることができると確信しています。

彼女の他、働いている看護師のほとんどは２人、３人と

子どもがいる母親という立場でした。このことには大変驚かされました。シンガポールの育児休暇は出産後4ヶ月であり、ほとんどのスタッフが元の勤務へと戻っていきます。もちろん12時間シフトの2交代もこなしています。シンガポールでは働く母親は当たり前のことでありますが、他国からの労働者を乳母として迎え入れている事情もあります。生活環境も価値観も異なる日本にすぐに適応できる問題ではありませんが、仕事と家庭生活の両立ということで、看護師がスキルアップを目指すという環境において大変恵まれていると言えます。

V.まとめ

今回の研修は、帰国後すぐに取り入れることのできる細かなことから、今後の看護教育に関わってくると思われることまでたくさんのことを学ぶ機会となりました。病棟では指導されることよりも指導することの方が多くなっていますが、私が学ぶ姿勢がさらに若い看護師の手本になればと思っています。

自分自身のことで言えば、私は一度大学病院を辞職しアメリカ合衆国で生活した経験があります。この経験がどのように今後の人生や看護師としてのキャリアに生きるのかは未知数でありましたが、このような研修の機会へとつながりました。多くの場面においてスタッフと直接コミュニケーションを取ることができるという形で役立てることができました。また研修中だけでなく、JHSIMCの看護師の方々と仕事の後も一緒に過ごすことによって、実際にどのような生活をしているのか、シンガポールの生活を肌で触れて感じることができました。そして彼女たちの看護観を理解する手助けにもなりました。こういった時間の共有はお互いに関心を持つことにつながり、より研修がスムーズに進んだように思います。

Ms. Elizabeth Lada Morse, Director of Nursing（看護部長）は最後に日本の病院がシンガポールに研修に来るように、こちらも日本の病院から学ぶことができればよりよい発展につながるとおっしゃっていました。もっとも多く直接的に患者ケアにあたり、人数の多い看護スタッフには変えていく力がある、と力強く述べられ、すべての看護スタッフが1つの役割を持っているCouncil（委員会）について説明してくださる姿には感銘を受けました。

今後も今回の研修で縁を持つことができたスタッフの方々との関係を保ち刺激を受けつつ、研修で学んだ知識、姿勢を今後に生かすよう日々努力したいと思います。

VI.おわりに

最後になりましたが、私のような者に快く研修の機会を与えてくださった中国・四国広域がんプロ養成コンソーシアムの関係者の皆様、様々なお世話をしてくださった事務局のみなさまに、この場をお借りして心よりお礼を申し上げます。またたくさんのご指導を頂きましたJohns Hopkins Singapore International Medical Centreのスタッフの皆様に深謝いたします。

文責　岡山大学病院
看護師　犬飼　倫子

a.セント・アンドリュース教会
b.スリ・ヴィラマカリ・アンマン寺院
c.スリ・ヴィラマカリ・アンマン寺院の内部（敬虔な信者たち）
d.サルタン・モスク
e.Deepavali ヒンズー教の正月
（闇に輝く光は善が悪に勝利したことを祝う光の祭典）

シンガポールは、お互いの宗教や生活習慣を尊重しあう多民族・多宗教国家です。中国系が人口の77%を占め、マレー系が14%、インド系が7%、残りがユーラシア系（欧亜混血人）、アラブ系その他となっています。 中国、マレー、インド、ヨーロッパなどの東西の多様な文化、言葉、宗教が渾然と調和しあって、この国独特の雰囲気をつくり出しています。

がん診療連携拠点病院

国立病院機構
岩国医療センターのがん診療

病院長　斎藤　大治

国立病院機構岩国医療センターは山口県の東端に位置し、瀬戸内海を見下ろす丘陵地に建つ580床の病院です。当院へは岩国市を中心とした山口県東部、広島県西部、および一部は島根県南部からも多数のがん患者が受診し、地域の一大拠点病院となっています。特に近隣には放射線治療が可能な施設がないため、放射線治療が必要な患者が広い範囲から送られてきており、岡山大学放射線科のご協力を戴きながら集学的治療を推進しています。その結果、がん患者は当院入院患者（年間新入院患者約11,500名）の15-20%を占めています。これに対応して、乳癌、肺癌、がん化学療法などの専門医を揃えるとともに、院内化学療法委員会主催の講習会を繰り返して、既に66名の院内化学療法認定看護師が育っています。がん患者の増加とともに内視鏡検査は年間約8,000件に達し、しかも年々増加し続けています。それでも同規模の病院としては必ずしも多い検査件数ではないことから、もう一頑張りが必要と担当医師は張り切っています。手術件数も増加の一途で、麻酔医不足に悩まされながら、平成19年度には全身麻酔件数は約2,000件に達しました。また、数年前から緩和医療にも力を注ぎ、緩和医療を中心にした病棟を作るとともに、緩和ケア認定看護師1名、がん性疼痛看護認定看護師2名を中心に、緩和医療チームが活発に活動しています。緩和医療には医療連携が重要な役割を果たしますが、土地柄、地域の医療機関との連携も円滑で、今年中には数種類のがんについて、地域医療連携パスが動き始めるはずです。

当院は築後40年を経過し、老朽化と手狭のため現代の最新医療を行うには支障を来たしています。そこで少し離れたところに地上9階、地下1階の新病院を建設する予定にしていますが、新しい病院では最新の医療機器を備え、あらゆる分野で一歩も二歩も進歩した診療を行う予定にしています。

がん診療連携拠点病院

社会保険徳山中央病院

病院長　林田　重昭

社会保険徳山中央病院は山口県周南市を中心とした3市（人口約26万人）の第2次保健医療圏、及びその周辺を含む約30万人の診療圏を持ち、一般病床454床、感染症病床12床を有す急性期病院です。加えて当地域の中核病院として、がん診療にも積極的に取り組んでおり、2003年12月地域がん診療連携拠点病院の指定を期に、各診療科がそれぞれ独自に取り組んでいましたがん診療を、当病院の全組織一体で行い、また地域連携を図りつつ、より質の高い医療の提供を目指してまいりました。具体的には地域連携室を強化し、がん診療相談を開始するとともに、がん診療を主体とした訪問看護また医師を伴う訪問医療も可能にしました。さらにがん専門医をはじめ専門看護師、薬剤師、放射線技師、MSWなどのコメディカルの各種育成プログラムに参画し、チーム医療を実践、集学的治療の充実がなされています。

2007年の診療部門の統計では、上部消化管内視鏡検査5224例、下部消化管内視鏡検査2011例、早期胃がんに対するEMR・ESD38例、大腸がん内視鏡治療61例、肝がんに対するラジオ波焼灼療法87件、PEIT24件、放射線照射・がん化学療法の肺がん50例でした。外科系治療においては胃がん117例、大腸がん144例、乳がん99例、を主にその他の一般外科、婦人科、泌尿器科、耳鼻科など、当院におけるがん切除・摘出術の総計は767症例でした。

また院内がん登録も年々増加し2007年は956例、昨年（2007年）開設した外来がん化学療法室を主体とした外来がん化学療法患者は月平均320人と急増しています。さらに本年（平成20年11月）には25床の緩和ケア特例病床の開設を予定しており、私たちは当院の理念である地域完結型医療の実践、またがん診療連携拠点病院の目指すがん診療、研究の向上に努力したいと思います。

中国・四国広域がんプロフェッショナル養成コンソーシアム
第６回がん看護専門看護師コースWG講演会

最新の疼痛マネジメントの実際とがん看護専門看護師の果たす役割

～がん化学療法を受けている患者を中心に～

がん患者にとって、疼痛を適切にコントロールされているかどうかは、その人のQOLを左右する重要な問題です。特に化学療法を受けている患者は治療に関連した不快症状や不安などが重複しているため、高度な看護実践力が求められます。今回の「中国・四国広域がんプロフェッショナル養成コンソーシアム」では、がん患者に対する疼痛マネジメントに関する新しい知識やケア方法について学習の機会を提供すると同時に、がん看護専門看護師の役割や活動についても理解を深めて頂ける場にしたいと思います。

講　師：田墨恵子氏
大阪大学医学部附属病院オンコロジーセンター
看護師長・がん看護専門看護師
日　時：平成21年1月25日（日）：13時～15時
場　所：徳島大学医学部保健学科4階　大講義室
参加費：無料

主催：中国・四国広域がんプロフェッショナル養成コンソーシアム

お問い合わせ・申込先：雄西智恵美（おにしちえみ）
FAX：088-633-9026　conishi@medsci.tokushima-u.ac.jp
※当日参加も受け付けていますが、資料等の準備のためできるだけ事前申し込みにご協力お願いします。

中国・四国広域がんプロ養成コンソーシアム　Vol.11

平成20年11月10日　発行

編集兼発行者
中国・四国広域がんプロ養成コンソーシアム事務局
TEL 086－235－7023

印刷所
有限会社 ファーストプラン